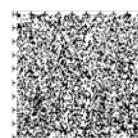


通常の学級における個別指導

— ひらがなの学習から児童を支える —



平成29年3月
東京都教育委員会



はじめに

東京都教育委員会は、平成16年に東京都における特別支援教育を推進するために、「東京都特別支援教育推進計画」を策定し、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童・生徒への指導と支援の取組を進め、全ての公立学校において特別支援教育体制の充実を図ってきました。

平成28年2月には、「発達障害の全ての児童・生徒が、その持てる力を最大限に伸ばし、将来の自立と社会参加を実現できるよう、適切な教育的支援を行うこと」及び「発達障害のある児童・生徒と障害のない児童・生徒が、共に学び合うことができるよう、通常の学級における教育的支援をはじめ、障害の状態に応じた多様な教育の場を拡充すること」を基本理念として、小・中学校、高等学校における発達障害教育に関する施策を展開するために、「東京都発達障害教育推進計画」を策定しました。

本冊子は、学級の中に読み書きに関して障害があり個別指導が必要な児童がいるが、どのように指導したらよいか分からない等、学級の児童の様子に心配を抱えている先生方の御参考にしていただきたいと考えております。発達障害の中でも、特に読み書きに関して障害のある児童に対し、通常の学級の中で行う個別指導の事例を紹介し、実践に取り入れやすくなるような内容にしています。本冊子を手掛かりにして、児童の読み書きに関する困難が少しでも改善し、読むことや、書くことの楽しさ、喜びを感じられるようになることを願っています。

なお、本冊子では、読み書きに関する障害を「読み書き障害」と表記します。

各学校におかれましては、読み書きに困難のある児童への指導の充実に、本冊子をお役立ていただきますようお願いいたします。

平成29年3月

東京都教育委員会

※本冊子に掲載している画像は、第2回東京都立特別支援学校アートプロジェクト展（平成29年2月20日～3月6日）に展示された作品です。

目 次

理論編

- 1 通常の学級における特別支援教育の重要性 4
- 2 通常の学級で特別な支援を実施することの効果 . 5
- 3 一斉指導と個別指導 6
- 4 読み書き障害とは 9

実践編

- 1 一斉指導・個別指導 1 年間の流れ 12
- 2 (1) 事例A 20
- (2) 事例B 22
- (3) 事例C 24
- (4) 事例D 26
- 3 一斉指導でのアプリケーション活用 28

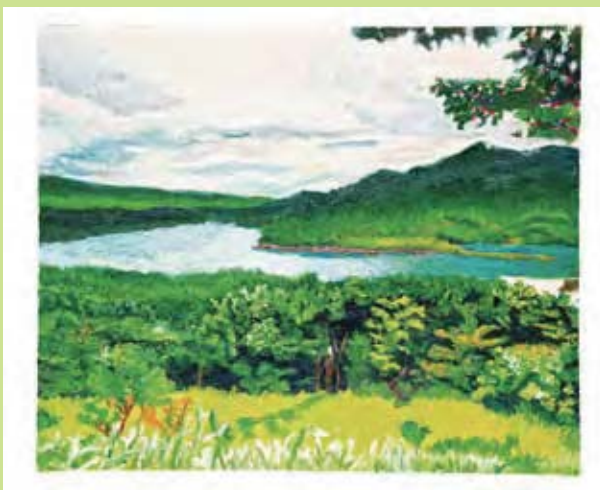
まとめ

- 1 成果 30
- 2 課題 30

- 資料 31

理論編

- 1 通常の学級における特別支援教育の重要性
- 2 通常の学級で特別な支援を実施することの効果
- 3 一斉指導と個別指導
- 4 読み書き障害とは



山口 俊輔 《山中湖 ～パノラマ台～》



花房 メグミアイビー 《プリンス TNB》

1 通常の学級における特別支援教育の重要性

学級の中に気になる様子の児童はいませんか？

- 急に予定が変わったり、初めての場所に行ったりすると不安になり、落ち着きがなくなってしまうことがある。
- 友達と話しているときに、自分のことばかり話してしまい、止められなくなることがある。
- 周りの人から「相手の気持ちが分からない自分勝手にわがままな子」と言われることがある。
- 頻繁に大事な予定を忘れたり、忘れ物をしたりする。
- 文字を読んだり書いたりするのが苦手であったり、作文や漢字の書き取り、音読が苦手であったりするため、学校の宿題に時間がかかってしまう。

都教育委員会が都内の公立小学校を対象に実施した調査では、通常の学級に在籍する児童・生徒の中で、校長が「発達障害」があるのではと考えている児童の割合は、小学校で6.1%という結果でした。すなわち、通常の学級の中に一人か二人程度、発達障害の可能性のある児童が在籍しているということになります。

通常の学級には様々な実態の児童が在籍しています。担任は一人一人の児童に目を配りながら学級を経営し、全ての児童の成長に向け日々指導を行っています。上記のような様子を示す児童たちは、学級の中で、何らかの特別な支援を必要としています。しかし、様々な理由から、適切な支援を受けられていないこともあります。

その原因は・・・



2 通常の学級で特別な支援を実施することの効果

何らかの困難を抱えている児童に対し、できるだけ早期から教育上必要な支援を行うことで

児童の学習意欲の向上・学力の向上
行動面・対人面のスキルアップ
集団適応能力の伸長
在籍学級の運営の安定化
二次的な障害の防止

などの、様々な効果が期待できます。

様々な困難を抱えている児童が集団の中で適切な支援を受け、力を付けていくことは、本人にとっての効果のみならず、友人や学級全体に対しても様々な良い結果を生むことにつながります。

良い結果とは、個別指導が必要な児童のための教材の工夫や提示の仕方、環境の整備などの配慮が、他の多くの児童にも有効に作用し、支援の必要な児童に対する手だてが一斉指導の充実につながるということです。

すなわち、通常の学級において特別支援教育の視点を取り入れることは

全ての児童を大切にする指導

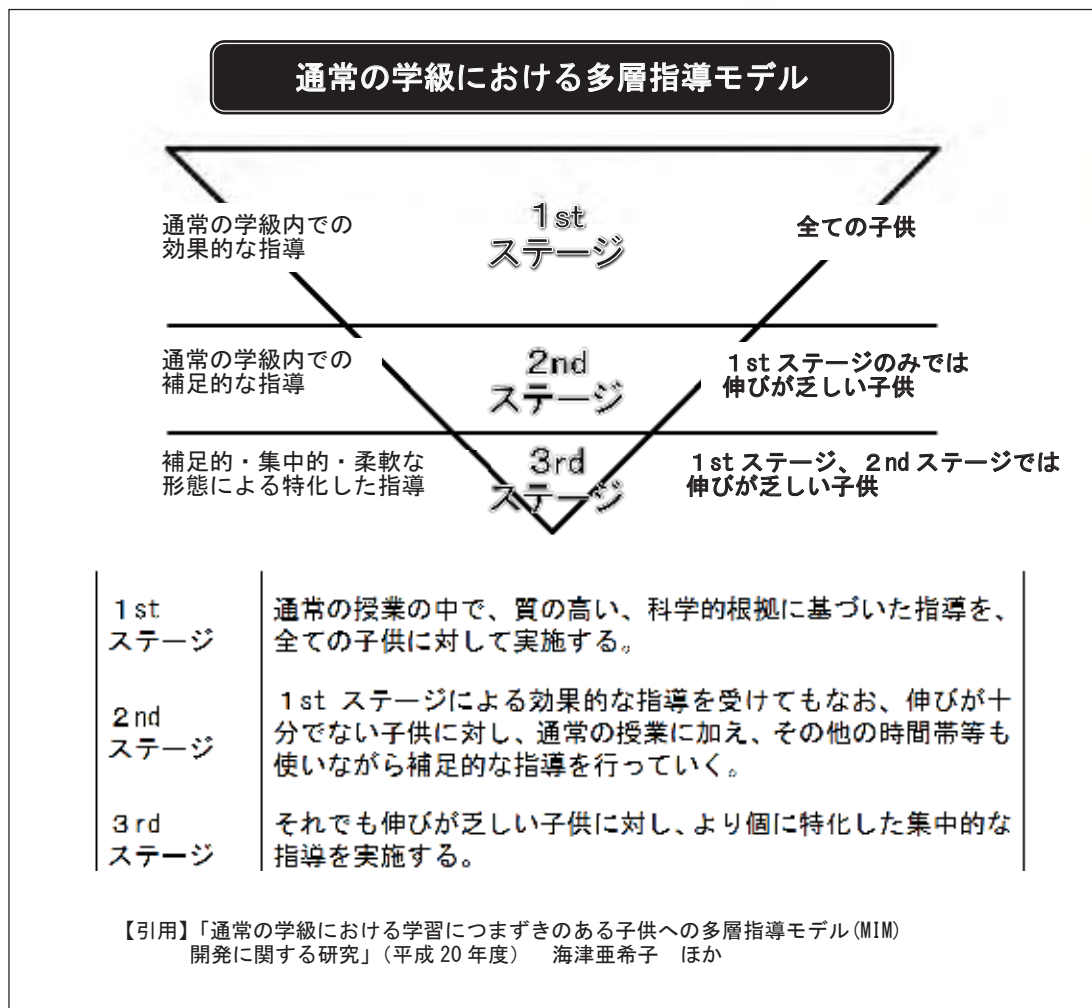
であるといえます。



3 一斉指導と個別指導

通常の学級に在籍している様々な実態の児童

通常の学級に在籍している児童の実態に応じ、下図のように、通常の一斉指導に加え、特別支援教育の観点からの個別指導を行う必要があります。



担任は様々な支援を必要とする児童に対し、一斉指導の中で個別指導を行うことが求められます。一斉指導の中で個別指導を行うことは、実際には従来から教室の中で様々な形態で行われています。

例えば、一斉指導の中で教員が個別に言葉掛けを行ったり、複数種類のワークシートを準備し、児童が学習進度に応じて選択できるようにしたりすることは、一斉指導の中での個別指導と言えます。

また、必要に応じて対一の指導時間を設けることもあります。

児童一人一人に対して適切な指導を行うためには、一斉指導と個別指導を別のものとして計画するのではなく、学級に在籍する全ての児童を対象とした一つの計画の中に、一斉指導と個別指導が適切に組み込まれていることが大切です。

一斉指導の中で個別指導を行う際の留意点

- 個別指導を一斉指導の中に位置付けた計画を立てる。
- 個別指導と一斉指導が有効に機能するような計画を立てる。
- 必要な支援を受けることは、普通のことだと受け入れられる学級集団をつくっていく。

どの学級にもいる特別な教育的支援を必要としている児童たち

どの学級にも、知的発達に遅れはないものの「正しく文字が読めない」「正しく漢字が書けない」「計算がとても苦手」「落ち着かず、授業中に離席してしまう」「全体への指示では理解できない」「友達とのトラブルが多い」「手先が不器用」「こだわりが強く、変化が苦手」など、気になる児童がいるのではないのでしょうか。

これらの児童に対し様々な指導を行っても、なかなか課題の改善が図られない場合、その要因の一つとして発達障害の可能性が考えられます。発達障害は発達障害者支援法において、「発達障害（自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害などの脳機能の障害で、通常低年齢で発現する障害）がある者であって、発達障害及び社会的障壁により日常生活または社会生活に制限を受けるもの」と示されています。

学習障害

全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す。

注意欠陥多動性障害

年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、又は衝動性・多動性を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学校生活で著しい困難を示す。

高機能自閉症

他人との社会関係の形成の困難さ、言葉の発達の遅れ、興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害である自閉症のうち、知的発達の遅れを伴わないもの。

教員は、児童がどのようなことで困っているのか、どのような支援を必要としているのかを理解し、具体的な支援策の検討を重ねることが大切です。

4 読み書き障害とは

学習障害の一つである読み書き障害について

読み書き障害は、知的な遅れや視覚障害はないが、読んだり書いたりすることが苦手な障害です。「文字とその文字が表す音とを一致させることが難しく、音読が極端に遅く、読み間違いが多い」、「音読と意味理解が同時にできにくいため、読んだ後に、内容を十分に理解できていない」、「読むことはできるが、その内容を文章に書くことが困難」など、一人一人様々な困難を抱えています。

文部科学省による平成24年の全国調査では、「知的発達に遅れはないものの読む、または書くに著しい困難を示す、通常の学級に在籍する児童・生徒の割合」は2.4%であったと示されています。

読み書き障害は、学習上の困難があることから、主たる指導・支援を学校で行います。集団での指導を基本とする通常の学級での指導において、個々の読み書きの実態をきめ細かく把握し、実態に応じた効果的な指導・支援を十分に行うことが求められます。

読みの特徴

- 簡単な文章が読めない
- 読み飛ばしをする
- 読み間違える
(例:「クリニック」→「クリーニング」)
- 似た意味の漢字と間違える
(例:「楽器」→「音楽」)
- 逆さ読みをする
- 意味に関係なく、似ている語を読み間違える
- 文字と音を結び付けるのに時間がかかる

書きの特徴

- 鏡文字を書く
- 言葉の順番が逆になる
- 発音通りに書くことが難しい
- 読み上げられた文字を適切に書くことが難しい
- 自分の意見や考えを書くことが難しい

読み書き障害の児童は、おしゃべりが上手で人間関係も良好な場合も多く、「見逃されやすい障害」と言われています。しかし、それゆえ誰にも気付かれず、苦しんでいる児童がいることを忘れてはいけません。ひらがなを学習する早期機会から適切な支援を受けることで、その後の児童の自立と社会参加は大きく変わっていくと言えます。

実践編

- 1 一斉指導・個別指導 1 年間の流れ
 - (1) 第1回 直音音読検査
 - (2) アプリケーションによる個別指導①
 - (3) 第2回 単音音読検査
 - (4) アプリケーションによる個別指導②
 - (5) 第3回 単音・単文音読検査
 - (6) その他のアプリケーションによる個別指導
- 2 (1) 事例A
(2) 事例B
(3) 事例C
(4) 事例D
- 3 一斉指導でのアプリケーション活用



安孫子 晃 《サンドアート》



仲村 春花 《ルンデ》

1 一斉指導・個別指導 1 年間の流れ

校内体制

保護者への周知

- ・保護者会や個人面談で説明
- ・お知らせ文書配布 39、40、41
ページ参照

音読検査及び個別指導を実施するための校内

- ・音読検査の実施場所の確保
- ・個別指導体制の整備
- ・検査実施中の他児童の指導体制の整備
- ・タブレット

音読検査

ひらがなを学習する1年生全員の音読の実態を正確に把握し、読みに困難がある児童を見逃さないために、全員を対象にして音読検査を行う。

(1) 第1回 直音音読検査

14ページ参照

※1

(1年生全児童対象)

1年生全員の、ひらがなの読みの実態を把握するために、直音の音読速度と読みの正確さについて検査を行う。

〔実施検査〕直音音読検査



(3)

16ページ参照

1年生全員の読音について検査を行う。

〔実施検査〕

4月

5月

6月

7月

8月

9月

個別指導

音読検査により、個別指導が必要と判断された児童に対し、アプリケーションを使用して個別指導を行う。



(2) アプリケーションによる個別指導① (ひらがな直音)

15ページ参照

第1回 直音音読検査において、直音の読みで指導が必要と判断された児童に対し、タブレットにダウンロードしたアプリケーション「ひらがな」を活用し、個別指導を行う。

(6) その他のアプリケーションによる個 読むことへの困難が大きい児童や、集中の続

一斉指導

個別指導で使用するアプリケーションを一斉指導でも活用し、学級全体でも読みの練習を行う。

アプリケーションを活用した一斉指導

1年生の「ひらがな」を読む力について、一人一人の事態把握を行い、課題のある児童に早期から必要な支援を行うことはとても大切です。アプリケーションを使った簡単な音読指導で成果の得られやすい「T式ひらがな音読支援」の方法を紹介します。

支援体制の整備

導を実施するための指導体制の整備
ット等の準備

- ・担当分掌の設置
- ・検査記録管理体制の整備

第2回 単音音読検査

※2

(1年生全児童対象)

年生全員の、よう音を含めたひらがな
の実態を把握するために、単音(直
よう音)の音読速度と読みの正確さに
て検査を行う。

〔実施検査〕 単音音読検査

(5) 第3回 単音・単文音読検査

※3

〔18ページ参照〕(個別指導を実施している児童のみ対象)

アプリケーションを活用した個別指導を実施して
いる児童の指導効果を確認するため、単音と単文の
音読速度と読みの正確さについて検査を行う。

〔実施検査〕 単音音読検査・単文音読検査

10月

11月

12月

1月

2月

3月

(4) アプリケーションによる個別指導②

(ひらがな単音)

〔17ページ参照〕

第2回 単音音読検査において、単音の読みに
ついて指導が必要と判断された児童に対し、タブ
レット等にダウンロードしたアプリケーション
「ひらがな単音」を活用し、個別指導を行う。

継続した個別指導

〔19ページ参照〕

第3回 単音・単文
音読検査において、指
導が必要と判断された
児童に対し、更に継続
して個別指導を行う。

別指導(随時)

〔19ページ参照〕

きににくい児童に「音読アプリ1」・「音読アプリ2」を活用し、個別指導を行う。

〔28ページ参照〕



※1 直音とは、日本語の音節のうち、よう音・促音・はつ音以外の音で、一音節が、かな一字で表されるもの

※2 単音とは、音声の連続を分解して得られる最も小さい音の単位。直音・よう音

※3 単文とは、本検査の中で使用する短い文章のこと

1－(1) 第1回 直音音読検査（6月実施）

第1回 直音音読検査は、ひらがなの読みの実態を把握するために、直音の音読速度と読みの正確さを測定する検査です。

- 対象児童：1年生全員
- 実施時期：6月頃

準備する物

- ・直音音読検査表[32～34ページ参照]（3枚の表を横につなげる。）
- ・直音音読検査記録用紙[35ページ参照]（児童の人数分）
- ・タイマー（ストップウォッチ）
- ・実施場所と実施体制の確保

実施手順

- ① 児童の前に直音音読検査表（3枚を横につなげたもの）を置く。



「ここに書いてあるひらがなを、縦に、このように（指で2行目辺りまでをたどって見せて）、声を出して順に読んでください。」

「1分間を図るので、間違えないように、できるだけ早く読んでください。分からないものは、飛ばしても構いません。『終わり』と言ったらやめてください」

- ② 最初の部分を手で隠す。

- ③ 隠していた手を離し、タイマーのスタートを押す。

「では始めます。スタート」

- 音読中は読み飛ばし（✓）、読み誤り（×）、自己修正（△）を記録用紙に記入する。
- 児童がシートを持って読んだり、指さししながら読んだりしてもよい。ただし、ペースを誘導する可能性があるため、検査者が文字を順に指さすことは行わない。

- ④ 1分経過したらタイマーを止める。

「終わり」

※タイマーの音に驚いたり緊張したりする児童には、音の出ない物を使用する。

- ⑤ 読んだ文字数、読み飛ばし、読み誤りなどを直音音読検査記録用紙に記入する。

【直音音読検査 結果の判断基準】
1分間の音読文字数が54個以下の場合は個別指導を実施

15ページ参照

1ー(2) アプリケーションによる個別指導①(6月～11月)

第1回 直音音読検査で個別指導が必要と判断された児童に対し、アプリケーションを使って楽しみながら読みの力を伸ばす取組を実施します。

1日5分間の学習を学級での指導に取り入れてください。1日1回の個別指導を連続して21日以上行います。

アプリダウンロードの仕方

スマートフォン、タブレットに「音読指導統合版アプリ」をダウンロードし、読み書き障害児童への個別指導に活用します。



- ① タブレット等のアプリダウンロード画面で、「鳥取大学」を検索する。
- ② 「ディスレクシア音読指導アプリ 単音直音統合版」を選び、ダウンロードする。

- 一度ダウンロードしたアプリケーションは、ネットワークに接続せずに使用できる。
- この統合版は、直音・単音が統合されたアプリケーションである。
- 10名までのユーザーが利用可能である。

アプリケーションによる個別指導①の実施手順

- ① アプリケーションを起動する。
- ② ユーザー名を登録する(2回目以降は登録済のユーザー名を使用)。
- ③ 「ひらがな直音」を選択する。
- ④ 練習を開始する(表示される直音を児童に発音させる。)
指導する大人が○、×を判断して押す。
○：音声が出る前に読めた場合
×：読めない(読み間違い)又は音声が先(同時)に出た場合
- ⑤ 5分経過し、アプリケーションが自動的に終了するまで音読を進める。



- 1日1回5分間の個別指導を連続して21日以上行う。
- 3回正答した文字は消去されていく。学習効果が上がった場合、指導時間は短くなる。
- 学習後、結果を見ながら児童と共に学習成果を振り返ることができる。

1－（3）第2回 単音音読検査（11月実施）

第2回 単音音読検査は、単音（直音＋よう音）の音読速度と読みの正確さを測定する検査です。第1回 直音音読検査は直音だけでしたが、第2回は、よう音も含めた検査です。

- 対象児童：1年生全員
- 実施時期：11月頃

準備する物

- ・単音音読検査表^{36ページ参照}
- ・単音音読検査記録用紙^{37ページ参照}（児童の人数分）
- ・ストップウォッチ
- ・実施場所と実施体制の確保

実施手順

- ① 児童の前に単音音読検査表を置く。



「ここに書いてあるひらがなを、縦に、このように（指で2行目辺りまでをたどって見せて）、声を出して順に読んでください。」

「間違えないように、できるだけ早く、全部読んでください。分からないものは、飛ばしても構いません。」

- ② 最初の部分を手で隠す。

- ③ 隠していた手を離し、最初の文字を読み始めたらストップウォッチのスタートを押す。

※音読中は読み飛ばし（✓）、読み誤り（×）、自己修正（△）を記録用紙に記入。

※シートを持って読んだり、指さししながら読んだりしてもよい。ただし、ペースを誘導する可能性があるため、検査者が文字を順に指さすことは行わない。

- ④ 最後の文字を読んだらストップウォッチを止める。

- ⑤ 所要時間、読み飛ばし、読み誤りなどを単音音読検査記録用紙に記入する。

「では始めます。スタート」

【単音音読検査 結果の判断基準】

- ① 音読表（50文字）を全て読み終わるのに要した時間が63秒以上
 - ② 「読み飛ばし文字数」と「読み誤り文字数」の合計が6文字以上
- ①、②いずれかに該当した場合、個別指導を実施 ^{17ページ参照}

1ー(4) アプリケーションによる個別指導②(11月～2月)

アプリケーションによる個別指導②の実施手順

- ① アプリケーションを起動する。
- ② ユーザー名を登録する(2回目以降は登録済のユーザー名を使用)。
- ③ 「ひらがな単音」を選択する。
- ④ 練習を開始する(表示される直音+よう音を児童に発音させる。)
指導する大人が○、×を判断して押す。
○：音声が出る前に読めた場合
×：読めない(読み間違い)又は音声が先(同時)に出た場合
- ⑤ 5分経過し、アプリケーションが自動的に終了するまで音読を進める。



- 1日1回5分間の個別指導を連続して21日以上行う。
- 3回正答した文字は消去されていく。学習効果が上がった場合、指導時間は短くなる。
- 学習後、結果を見ながら児童と共に学習成果を振り返ることができる。

1－(5) 第3回 単音・単文音読検査（2月実施）

第3回 単音・単文音読検査は、単音音読検査と単文音読検査を実施します。
単音音読検査は第2回 単音音読検査で実施した検査、単文音読検査は短い文を3文読む検査です。

- 対象児童：第2回 単音音読検査後、アプリケーションによる個別指導②を実施した児童
- 実施時期：2月頃

ア 単音音読検査 16ページ参照

第2回 単音音読検査と同じ検査です。

ただし、判断の基準が異なります。

【単音音読検査 結果の判断基準】

- ① 音読表(50文字)を全て読み終えるのに要した時間が67秒以上
- ② 「読み飛ばし文字数」と「読み誤り文字数」の合計が9文字以上

イ 単文音読検査

準備する物

- ・単文音読検査表（3枚）38ページ参照
- ・単文音読検査記録用紙38ページ参照（児童の人数分）
- ・ストップウォッチ
- ・実施場所と実施体制の確保

実施手順

- ① 児童の前に単文音読検査表を置く。



「文章を書いたカードを渡しますので、声を出して読んでください。順番に3枚のカードを読んでもらいます。」

- ② カードを手渡し、第1文を読み始めたらストップウォッチのスタートを押す。第1文を読み終わったらストップウォッチを止め、音読時間を記録する。
- ③ 第2文、第3文と同様に測定し、三つの文の音読時間の合計（秒）を記録用紙に記入する。

「では始めます。スタート」

【単文音読検査 結果の判断基準】

- ③ 三つの単文を全て読み終えるのに要した時間が35秒以上
- 単音音読検査の①、②または単文音読検査の③、いずれかに該当した場合、継続した個別指導を実施

単文音読検査 記録用紙

氏名： _____ 番号： _____ 検査日： ____年 ____月 ____日

① 「青い丸にさわってから青い四角にさわってください」
② 「黒い四角の上に青い丸をおいてください」
③ 「青い丸ではなくて白い四角をとってください」

	音読時間（秒）
第1文	
第2文	
第3文	
総計	

1－(6) その他のアプリケーションによる個別指導（随時）

「音読アプリ1」・「音読アプリ2」

「音読指導統合版アプリ」はひらがな1文字がランダムに表示されます。児童がゲーム感覚でアプリケーションを楽しみながら学習できるように作られていますが、読むことへの困難が大きい児童や、集中の続きにくい児童においては、5分間取り組むことが難しい場合があります。

そのような児童には、下記のアプリケーションを活用することも効果的です。

音読アプリ1「ビギナー編」



2～3文字の単語とその単語の示す絵が表示される。

音読アプリ2「チャレンジャー編」



よう音が含まれる4文字までの単語とその単語を示す絵が表示される。

これらのアプリケーションによって、単語の読み（音）とイメージ（絵）を関連付ける学習を行うことができます。単語を聞くと、その音からイメージが思い浮かぶようになることは、読みの指導にとっても大切です。文字と絵のイメージを関連付けて学習することができるので、文字だけの練習では十分な効果が得られない児童への指導に有効です。

必要に応じて使い分けて活用すると、より一層指導効果が上がります。



「音読アプリ1」 画面イメージ



「音読アプリ2」 画面イメージ

2- (1) 事例A

一斉指導の中では読みに課題があると思われていなかったAさん。しかし、第1回の音読検査で個別指導が必要と分かり、個別指導を開始しました。少しずつ読みが上達し、第3回の音読検査で個別指導は終了することができました。

児童Aの実態

- ・ 元気で明るく、休み時間はいつも外遊びを楽しんでいる。
- ・ 好きなことへの集中力が高い。
- ・ 人懐こく、上級生からかわいがられている。一方で、友達とトラブルになった際に、自分の言ったことややったことをすっかり忘れてしまうことがある。
- ・ 授業中に思ったことをすぐに口に出してしまったり、自分の好き嫌いでやる気が左右されたりすることが多い。
- ・ 先が見通せないことや、未経験なことに対して不安がある。
- ・ 1学期は音読において大きな課題は感じられなかった。



第1回 直音音読検査

- ・ 音読よりも、書字や作文の課題が大きく、読みの課題は見過ごされていた。
- ・ 音読検査を実施したことで、読みそのものにも課題があることが分かった。

1分間の音読文字数：52文字

第2回 単音音読検査

- ・ これまで続けてきたアプリケーションで果で、前回の検査より首を傾げる回数が見間違いも少なくなった。
- ・ よう音はとても読みにくそうだったが、後まで取り組んだ。

音読時間：68秒 誤読数：5文字

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月



アプリケーションによる個別指導①(ひらがな直音)

- ・ ICTを活用した学習の一つとして、学級全体に提示した。
- ・ 個別指導は、放課後の時間を活用し、他の児童が帰った後に毎日実施した。
- ・ 短時間で実施できるため、放課後の時間でも負担がない。友達との時間が減ることを嫌がっていたので、本児にとっては放課後の実施が適していた。
- ・ アプリケーションを使った楽しい学習ができるということで、とても楽しんでた。
- ・ 1日1回の学習なので、「もっとやりたい」と言っていた。

成果

- 以前は授業中に分からないことがあると、落ち着かなくなったり、すぐ姿勢が崩れたりしていたが、読みがスムーズになってきたことで、授業に集中できるようになってきた。
- アプリケーションの学習を始めてから、学習に対して自信が持てるようになった。
- 分からないことがあると、「分からない」とはっきり言えるようになり、一斉指導の中での意思表示が可能になった。
- 自分の考えを書いたり、発言したりすることが増えた。
- 長い文章を読む際は、まだ苦手そうな表情を見せることがあるが、段落ごとに分けて提示することで、最後まで音読することができるようになった。

課題

- △ 以前より読むことに対する抵抗がなくなってきたとはいえ、少し読みにくい課題に対しては集中が続かないことがある。引き続き実態を確認しながら、丁寧に読み書きの指導を行う必要がある。

第3回 単音・単文音読検査

- ・ 単音音読検査は49秒で読み終えることができ、約20秒も短縮できた。
- ・ アプリケーションでの練習により自信が芽生えたようで、自信を持って答えることができた。
- ・ 単文音読検査は「これでいいの」と不安そうな様子で取り組んだ。第1文の「さわってください」を「さわった」と読んだり、第3文の「赤い丸では」を「ハ」と誤読したり、2文字読み飛ばしたりした。

【単音音読検査】音読時間：49秒 誤読数：0文字
【単文音読検査】音読時間：32秒

第3回音読検査
の結果
個別指導終了

の学習成
減り、読
懸命に最

月

11月

12月

1月

2月

3月

アプリケーションによる個別指導②（ひらがな単音）

- ・ 2学期末からは、学校と家庭それぞれでアプリケーションを使った学習を行った。
- ・ 学校と家庭双方での取組が相乗的な効果を生み、日に日に読む速度が速くなった。
- ・ アプリケーションでは次々に文字が出てくるので、そのタイミングに合わせ、大きな声で答えるようになっていった。
- ・ 間違えても気を落とさず、次の問題へ移ることができるようになり、集中が持続するようになった。
- ・ 自分から、今日はいつアプリケーションでの学習をするのかと聞いてくるが増え、個別学習への前向きな姿勢が見られるようになった。

2－（2） 事例B

ひらがなの学習を一通り終えても、読めない文字がいくつかあったBさん。行動が全体的にゆっくりなため、学習においても時間をかけて進める必要がありました。アプリケーションを活用した個別指導の効果はすぐに現れ、またたく間に読みが上達し、第2回の音読検査で個別指導は終了することができました。

児童Bの実態

- ・ 行動が全体的にゆっくりである。指示を聞き、すぐに行動することが苦手。
- ・ いつもにこにこしているので、困っていると友達が助けてくれる。
- ・ 学習への取組もゆっくりである。個別に言葉掛けをすることで取り組める。
- ・ 1学期末は、ひらがなの中で読めない文字や書けない文字があった。
- ・ 文章を書くのが苦手で、自分の考えを書く課題では「ない」と書くことが多い。



第1回 直音音読検査

- ・ 自分のペースで読み、一行読み終わるごとに担任の顔を見ていた。
- ・ 「なるべく速く読むように」と説明したが、緊張感がなく、自分のペースで読んでいた。
- ・ 読み飛ばしや読み誤りはなかったが、全体にゆっくりで、音読文字数は少ない結果となった。

1分間の音読文字数：38文字

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

アプリケーションによる個別指導①（ひらがな直音）

- ・ 一斉指導では、ゆっくりとしたペースではあったが、個別指導では、集り組むことができた。
- ・ 「し」と「じ」の発音が不明瞭だった。
- ・ 読み間違いに気付くとため息をもらし、言い直しをすることができなかつた。
- ・ 毎日5分間の学習を2週間継続して行い、全問正答できた時はとてもうな表情を見せていた。

成果

- 以前は学習において、「できるようになってうれしい」とか、「できなくてくやしい」などといった気持ちの表出が少ない児童であったが、音読アプリで正答できると、とてもうれしそうな表情を見せるようになった。
- 正答を繰り返すことで、他の学習に対する意欲も向上してきた。
- 毎日のアプリケーションによる個別指導を通し、間違えないで滑らかに読むことができるようになった。

課題

- △ 読み間違えることはなくなったが、よう音を書くことはまだ難しい。書きの困難は、読みの難しさと連動しているので、さらに読みの練習を続ける必要がある。
- △ 読書が好きになるまで、練習を続けていく。

第2回 単音音読検査

- ・ マイペースではあるが、滑らかに、自信を持って読むことができた。
- ・ 第2回音読検査において、基準値を大きく超えることができたため、アプリケーションを活用した個別指導は終了した。

音読時間：41秒 誤読数：1文字

第2回音読検査
の結果
個別指導終了

0月 11月 12月 1月 2月 3月

中して取

った。
れしそう



2－（3） 事例C

第1回 直音音読検査では、特に読みの困難はないという結果だったCさん。しかし、第2回 単音音読検査でよう音の読みに明らかな困難があることが分かり、個別指導が必要との結果となりました。3学期から、アプリケーションを使った個別指導を始めましたが、第3回の検査でも更に継続した個別指導が必要と判断されました。

児童Cの実態

- ・ 明るく活発で、誰とでも仲良くすることができる。
- ・ 感情的になるとその場の状況が分からなくなる。
- ・ 注意力が散漫で、集中できないことがある。
- ・ 算数、国語共に個別的な配慮を必要としている。
- ・ 文章の読み取りや、文章を書く学習も苦手で、本人も苦手意識がある。
- ・ 漢字学習には前向きで、保護者と一緒に取り組んでいる。



第1回 直音音読検査

- ・ 濁音や半濁音（特に「ぢ」）で迷う様子が見られたが、直音音読検査では特に大きな課題はなかった。
- ・ 終わった後は達成感に満ちた表情だった。
- ・ 授業では少し音読を苦手そうにする様子があったが、今回の検査結果では大きな困難は見られなかったため、個別指導は行わなかった。

1分間の音読文字数：73文字

第2回 単音音読検査

- ・ 前回の検査よりも濁音、半濁音
- ・ 今回加わったよう音の読みが難
- ・ 今回のテストは前回の結果よりと表れた。

音読時間：68秒 誤読数：8

4月

5月

6月

7月

8月

9月



成果

- 一斉指導では周囲の音読のスピードに合わせることが難しく、読んでいる箇所が分からなくなってしまうことがあったがアプリケーションを使った個別指導を通して、少しずつ指で追えるスピードが上がった。
- 以前はよう音で迷う様子が見られたが、練習を繰り返すことで迷わず読むことができるようになった。
- 読みの困難が改善されたことが自信にもなっており、学習意欲が向上した。

課題

- △ 文章になると、単語の区切りが分かりにくいようである。「音読アプリ1」や「音読アプリ2」を活用して引き続き個別指導を行い、読みの速さの改善を目指す必要がある。
- △ 書きの困難についても個別指導が必要である。

第3回 単音・単文音読検査

- ・ 読み間違いはほとんどなかった。
- ・ 単文は単語の区切りが分からず迷いながら読んでいたため、読む速度がゆっくりになってしまった。
- ・ アプリケーションでの個別指導の結果、よう音の混乱は明らかに減少した。

〔単音音読検査〕音読時間：32秒
〔単文音読検査〕音読時間：40秒

誤読数：3文字

で迷っていた。
しく、時間を要した。
読みの苦手さがはっきり

文字

10月 11月 12月 1月 2月 3月

アプリケーションによる個別指導②（ひらがな単音）

- ・ 保護者の協力を得て、冬休みに自宅でアプリケーションを活用した個別学習に取り組んだ。
- ・ アプリケーションを活用した学習は1日1度しかできないが「もう1回やりたい」と言い、楽しく取り組むことができた。

第3回音読検査において、引き続き個別指導が必要と判断されたため、「音読アプリ1」「音読アプリ2」を活用した個別指導を継続する。

2-（4） 事例 D

学習面、生活面全体的に遅れが心配なDさん。第1回 直音音読検査後から継続した個別指導を行いました。ゆっくりではありますが、少しずつ読みは上達しています。

また、音読検査や個別指導の取組について、丁寧な説明を保護者に行ったところ、Dさんにはより丁寧な個別指導が必要だということを保護者に理解していただくことができ、特別支援学級への転籍について検討を始めることができました。

児童Dの実態

- ・ 穏やかな性格で、自分の身の周りのことは、自分でできる。とても努力家である。
- ・ 言葉の発音が不明瞭なところがあり相手に伝わりにくい。
- ・ 学習内容の定着には、個別的な支援と時間が必要である。
- ・ 読みは、一文字一文字読み、単語をまとまりとして読むことは難しい。
- ・ 授業中の音読では、担任が文節で区切って読んだ後に続いて読んでいる。
- ・ 書きでは、濁音・半濁音やよう音を正しく書くことが難しい。
- ・ 文章を書く際には、児童が発言した言葉を担任が紙に書き、それを視写している。



第1回 直音音読検査

- ・ 一文字一文字を指でたどりながら読んでいた。
- ・ 見た文字を音に変換するのが苦手なため、音読に時間がかかった。
- ・ 濁音と半濁音は、ほとんど読み飛ばし、読むことができないようだった。

1分間の音読文字数：16文字

第2回 単音音読検査

- ・ 読む速さに変化はなかったが、濁音
- ・ よう音は、「しゅ」を「し」と最初の
- ・ 読むことに対して少し抵抗感が減っ

音読時間：105秒 誤読数：16

4月

5月

6月

7月

8月

9月



アプリケーションによる個別指導①（ひらがな直音）

- ・ 「は」と「ほ」、「ぬ」と「ね」の読み間違いがあった。
- ・ 濁音、半濁音で混乱している様子は続いたが、少しずつ定着していった。
- ・ 不正解が続いたことによる意欲撃退や、疲れと自信のなさの表れなどで正答率が低くなることも多かった。
- ・ 個別指導は、毎日給食開始前の時間に行った。
- ・ 画面に出てくるひらがなではなく、変化する色に興味を持っていた。

成果

- 文字を読む速さが少し速くなった。
- 直音は、ほとんど正しく読めるようになった。
- よう音は、「しゅ」を「し」「ゆ」と読んでしまうが、「しゅ」が「し」と「ゆ」の組み合わせであることを認識できるようになった。
- 文字を読むことに対して、抵抗感が少なくなった。
- この取組により、Dさんの実態把握を深め、保護者と共通理解することができた。今後の支援についても、前向きに検討を始めるきっかけとなった。

課題

- △ 読むことだけでなく、全体を通して学習内容の定着に難しさがあるため、アプリケーションを活用した指導だけでなく、継続的に個別指導を行う必要がある。

第3回 単音・単文音読検査

- ・ 直音については、自信を持って読むようになった。
- ・ よう音を「し」「ゆ」と2音で読むようになった。
- ・ よう音はまだ不正確だが、全体的に滑らかに読むことができるようになり、読む速度が速くなった。
- ・ 単文は文としてではなく、一文字ずつ読んでいた。

〔単音音読検査〕音読時間：92秒 誤読数：10文字
〔単文音読検査〕音読時間：44秒

と半濁音の読み飛ばしが減った。
文字のみ読んでいた。
て自信が持ててきている。

文字

10月

11月

12月

1月

2月

3月

アプリケーションによる個別指導②（ひらがな単音）

- ・ 音読文字数の伸びは非常に緩やかで、正答率も5割くらいが続いた。
- ・ 無意味な文字を読むアプリケーションには集中が続かない様子が見られたので「音読アプリ1」を併用して取り組んだ。絵が出てくる「音読アプリ1」の方が集中できた。
- ・ 絵の表示を見て答えていることが多く、絵から連想して文字は見えていない様子も見られた。

アプリを活用した個別指導だけでなく、より丁寧な個別の支援が必要だと判断された。
保護者との連携を深め、本児にとって最適な学習環境を検討していく。

3 一斉指導でのアプリケーション活用

学級の状況

- ・ 一斉指導での音読では、得意な児童と少し苦手な児童が混在している。
- ・ 児童一人一人の音読について、明確な評価は行っていなかった。
- ・ 家庭学習として、音読の宿題を毎日出している。

実施時間

国語の時間の最初の場面 5分間

実施場所

教室

教材教具

大型テレビモニタ、タブレット等



成果

- ICT機器を活用した学習は、児童の興味・関心が高いため、授業の最初に行うことで、集中を高めることができた。
- 個別指導でアプリケーションを活用している児童にとって既習の課題なので、一斉指導の中で自信を持って読むことができた。
- 一斉指導で取り組むことで、アプリケーションを使った個別指導について周囲の児童の理解が深まった。
- 毎時間（国語）の導入に活用することで、学級の児童全員で音読練習が行えた。
- 学級全体の読むことへの関心を高めることができた。

まとめ

- 1 成果
- 2 課題



《バッチコーイ》



川井 亮太朗 《マンション》

1 成果

- 1年生全員のひらがなの読みに関する実態把握を実施したことで、普段の授業では読めているように捉えられる児童の中にも困難を抱えている児童がいることが分かり、適切な指導を行うことができた。
- アプリケーションを使った個別指導は、児童の学習意欲が高く、楽しみながら取り組めるため、継続した指導が可能である。また、1日1回5分間という短い時間で手軽に指導が行えることで、担任にとっても一対一の指導時間が無理なく継続して確保できた。
- 読みの苦手さが改善されることで、授業への参加意欲が高まったり、積極的に発言することが増えたりするなど、授業に集中できるようになった。
- 読みの苦手さが改善されることで、音読だけでなく、学習全般に対して自信が持てるようになり、自己肯定感が高まった。
- 客観的な指標による実態把握を実施することで、児童の課題について保護者と共通理解を深めることができ、実態に応じた支援について検討を始めるきっかけとなった。
- アプリケーションを使った学校での個別指導に加え、自宅でも同様にアプリケーションを使って学習を行った児童は、より高い指導効果を得ることができた。

2 課題

- △ 通常の学級の中で、実態に応じた個別指導を行うためには、学習指導案の中に個別指導を組み込み、計画的に実施する必要がある。
- △ 個別指導を実施した児童には、アプリケーションを使用した個別指導が終了した後も、継続した支援が必要であるので、個別指導計画により、指導の内容・方法を引き継いでいく必要がある。
- △ 読み書き障害の児童の中で、本アプリケーションでの個別指導を実施しても期待するような成果が得られにくい場合がある。そのような児童には、通常の学級での個別指導だけでなく、さらに実態に応じた個別的な指導が必要と考えられるため、特別支援教室の利用等を検討する必要がある。

資料

直音音読検査表

直音音読検査 記録用紙

単音音読検査表

単音音読検査 記録用紙

単文音読検査表

単文音読検査 記録用紙

保護者宛て配布文書例

※ 1 枚目から 3 枚目までの表を、横につなげて使用する。

直音音読検査表 (1 枚目)

わ	す	た	ぶ	ち
べ	み	ぎ	よ	ぞ
ぶ	む	だ	ほ	ら
ゆ	で	あ	が	く
る	ぽ	き	の	ち
お	せ	げ	ふ	ど
は	め	び	つ	づ
ぺ	や	ぎ	こ	ひ
け	ぜ	ろ	ん	れ
ば	て	か	を	う

直音音読検査表（2枚目）

え	ぐ	せ	な	わ	に	こ	ぬ	へ	ぼ
こ	れ	だ	ば	を	げ	ね	ず	し	そ
び	ぽ	り	す	め	む	じ	さ	え	も
た	ち	ふ	ら	ず	み	ま	な	ば	り
や	う	ま	べ	お	ど	ぐ	と	い	び

直音音読検査表（3枚目）

を	う	け	ぜ	ろ
ろ	ひ	ぱ	て	か
そ	ね	ぞ	さ	ぼ
ふ	ぎ	と	ん	び
あ	ぬ	ぱ	し	で
ほ	つ	じ	く	づ
か	も	ぜ	て	ぶ
は	ぎ	に	が	る
ち	き	ぺ	ゆ	の
へ	よ	い	け	い

直音音読検査 記録用紙

氏名：_____ 番号：_____ 番 検査日：_____ 年 _____ 月 _____ 日

(読飛ばし✓, 読み誤り×, 自己修正△)

41			31		21		11		
わ	べ	ぶ	ゆ	る	お	は	ぺ	け	ぼ
す	み	む	で	ぼ	せ	め	や	ぜ	て
た	ざ	だ	あ	き	げ	び	ぎ	ろ	か
ふ	よ	ほ	が	の	ふ	つ	こ	ん	を
ち	ぞ	ら	く	ち	ど	づ	ひ	れ	う

91		81		71		61		51	
え	ぐ	せ	な	わ	に	ご	ぬ	へ	ぼ
こ	れ	だ	ば	を	げ	ね	ず	し	そ
び	ぽ	り	す	め	む	じ	さ	え	も
た	ち	ぶ	ら	ず	み	ま	な	ば	り
や	う	ま	べ	お	ど	ぐ	と	い	び

141		131		121		111		101	
を	ろ	そ	ふ	あ	ほ	か	は	ぢ	へ
う	ひ	ね	ぎ	ぬ	つ	も	ざ	き	よ
け	ぱ	ぞ	と	ぱ	じ	ぜ	に	ぺ	ご
ぜ	て	さ	ん	し	く	て	が	ゆ	け
ろ	か	ぼ	び	で	づ	ぶ	る	の	い

1分以内に読み終わった場合は時間を記録 (_____ 分 _____ 秒)

	1分間に 読んだ文字数(A)	誤読数(B)		自己修正 △	1分あたりの 文字数(A-B)
		読み飛ばし ✓	読み誤り ×		
合 計					

≤54個で
個別指導の
対象と判断

よ	す	きゅ	に	ぴゃ
と	にゃ	そ	しょ	く
じょ	ら	ちゅ	ぺ	れ
ぜ	え	きゅ	ち	りゃ
ぴ	によ	か	ひゅ	じ
りゅ	ぼ	じゅ	つ	ぶ
い	お	びゃ	きょ	ま
げ	びゅ	む	しゃ	が
びょ	て	きゃ	ぐ	の
は	みょ	ぬ	し	ちゃ

単音音読検査 記録用紙

検査日： 年 月 日

氏名： 性別： 男 ・ 女 番号： 番

は	びよ	げ	い	りゅ	び	ぜ	じょ	と	よ
みよ	て	びゅ	お	ぼ	によ	え	ら	にゃ	ず
ぬ	ぢゃ	お	びゃ	じゅ	か	ぎゅ	ちゅ	そ	ぢゅ
し	ぐ	しゃ	きょ	つ	ひゅ	ぢ	ぺ	しよ	に
ちゃ	の	が	ま	ぶ	じ	りゃ	れ	く	びゃ

音読時間 ≥ 63 秒、誤読数 ≥ 6 個 いずれか一つ該当すれば、個別指導の対象と判断

音読時間	誤読数				自己修正 △	個
	秒	読み飛ばし し	個	読み誤り ×	個	個

単文音読検査表

※三つの文を一文ずつA4 サイズに印刷する。

あお まる あか しかく 青い丸にさわってから赤い四角にさわってください。
くろ しかく うえ あか まる 黒い四角の上に赤い丸をおいてください。
あか まる しろ しかく 赤い丸ではなくて白い四角をとってください。

単文音読検査 記録用紙

氏名： _____ 番号： _____ 番 検査日： _____ 年 月 日

- ① 「青い丸にさわってから赤い四角にさわってください。」
- ② 「黒い四角の上に赤い丸をおいてください。」
- ③ 「赤い丸ではなくて白い四角をとってください。」

	音読時間（秒）
第1文	
第2文	
第3文	
総 計	

≥35秒で
個別指導の
対象と判断

小学校 1 年生「ひらがな」の学習

ひらがなが読めることは、小学校 1 年生にとって、とても大切な力です。「T 式ひらがな音読支援」を取り入れた音読指導を行い、児童の読みの力を伸ばし、学校生活をより楽しく豊かなものにしていきます。

国立研究開発法人

国立成育医療研究センターこころの診療部長

小枝達也 先生より

この「T 式ひらがな音読支援」は鳥取大学小枝研究室が開発したものです。

この指導によって読めない文字や、誤った読み方を減らすことができ、多くの児童の読みが改善されたというデータも得られています。

本プログラムにより、多くの 1 年生のひらがなの音読が、スムーズになることを期待しています。



読めると、いにとたくさん！

言葉の意味が分かるようになります。

文章がすらすら読めるようになります。

授業がよく分かり、学ぶことが楽しくなります。

読書が好きになります。

**学校って楽しいな！
勉強がんばろう！**

保護者宛て配布文書例②

平成**年**月**日

1年生の保護者の皆様

*****小学校
校長 ** **

「ひらがな音読確認・音読指導」実施について（お願い）

日頃より、本校の教育活動及び学年・学級運営に、御理解と御協力を頂きありがとうございます。

さて、本校では、1年生を対象に「ひらがな音読確認・音読指導」に取り組むこととなりました。

ひらがな読みの習得は1年生にとって重要な課題であり、その後の学習の基礎となるものです。この取組は、読みの困難さを早期に発見し指導することで、就学初期の段階での読みのつまづきを小さくし、その後の学力不振や学校不適應の未然防止の一助とすることを目的としています。

この取組を通して、本校児童の音読能力の改善や学習意欲の向上を図り、学校生活がより楽しく、生き生きとしたものになるようにしていきたいと考えています。

そこで、一人一人がどのくらい読めているか確認（音読確認）し、併せてタブレット端末等による個別の支援（音読指導）を行うことで、正しく、流ちょうに読む力の育成を図っていきます。

つきましては、下記のように、音読確認・音読指導を実施しますので、取組の趣旨及び実施への御理解と御協力をお願いいたします。

記

1 音読確認について

(1)実施時期 1回目（6月） 2回目（11月） 3回目（2月）

※3回目は、2回目の音読確認で、より支援が必要となった場合のみ

(2)方 法 個別確認（一人当たりの所要時間2～3分程度）

(3)内 容 ひらがなの音読時間と誤答数の確認

直音（「あ」、「い」などの、ひらがな1字で表されるもの）
単音（直音＋よう音「や」「ゆ」「よ」）
単文

2 音読指導について

(1)タブレット端末等を使用し、「T式ひらがな音読支援」を実施します。

(2)音読指導を行うお子さんについてのみ、保護者の方に個別にお知らせします。

3 その他

(1)音読確認の実施については、その都度お知らせいたします。

(2)この取組は、ひらがなの読みを支援するものです。学級別及び個人の確認結果は一切公表いたしません。

平成**年**月**日

1 年 組 さん
保 護 者 様

****小学校
校長 ** **

「ひらがな音読指導」の実施について（お知らせ）

日頃より、本校の教育活動及び学年・学級運営に、御理解と御協力を頂きありがとうございます。

先日、第1回目の音読確認を実施しました。子どもたちは、やや緊張していましたが、1分間の確認調査で、ひらがなの直音（「あ」、「い」などの、かな1字で表されるもの）をたくさん音読することができていました。今後は、個人差に応じて音読指導を行い、より正しく、流ちょうに、自信を持って読む力の育成につなげてまいります。

その結果、お子さんにつきましては、より正しく、より流ちょうに、より自信を持って読むことができる力の育成につなげていくことの大切さについて助言・指導を受け、「ひらがな単音」の音読指導を行うことにいたします。

音読指導に当たっては、音読に取り組んだお子さんが頑張ったことをほめ、音読する楽しさや成就感・達成感を味わわせ、音読する力や学習する意欲の向上につなげていきたいと考えています。また、各学級の国語科を中心とした学習の中で、学級全体での指導・取組も工夫して行ってまいります。

つきましては、下記のように音読指導を行います。この取組の趣旨及び実施への御理解と御協力をお願いいたします。

記

1 音読指導について

- (1) タブレット端末を使用し、「T式ひらがな音読支援」を実施します。
- (2) 担任及び専門員が、お子さんの負担にならないよう、時間や場を考慮し、1日1回、5分間の音読指導プログラムで指導します。
- (3) 指導期間は、**月**日（*）から**月までを予定しています。

2 第2回目の音読確認の実施について

全員を対象にした、第2回目の音読確認を、11月に実施します。実施日については改めてお知らせします。

あとがき

通常の学級に在籍している読み書き障害の児童に対して、通常の学級の中で行うことのできる、有効な実態把握及び個別指導の方法を紹介してきました。本冊子で紹介した実践を東京都の全ての小学校に広め、読み書き障害があると思われる児童に対して適切な指導・支援を実施し、少しでも児童の読みの苦手が改善されることを願っています。

また、読み書きの上達には「読み聞かせ」がとても効果的だともいわれています。ぜひ学校やご家庭での読み聞かせを推進し、本に親しむ環境作りを進めていただけると幸いです。



本冊子をまとめるに当たり、研究協力者として、児童への支援方法を御提供、御指導いただきました、国立研究開発法人 国立成育医療研究センターこころの診療部長 小枝達也 先生に、厚く御礼申し上げます。

そして、世田谷区立烏山小学校と文京区立林町小学校の校長先生をはじめ、先生方には多大なる御協力と情報提供をいただきました。併せて心より感謝申し上げます。

通常の学級における個別指導
— ひらがなの学習から児童を支える —

東京都教育委員会印刷登録
平成28年度 第234号

発行日	平成29年3月31日
発行	東京都教育庁指導部特別支援教育指導課
所在地	東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号	03（5320）6847

